

# 南卓男先生を偲んで

焦 昇

南卓男先生が令和5年8月28日に薬石効なく息を引き取られました。先生の訃報を悲しみの中で接するにおよび、医師会の先輩方の中でもとりわけ小生にとりお世話になったお一人である南先生を偲んでみたいと思います。

先生は昭和15年8月24日のお生まれで戦中派と呼ばれる年代に近い方です。昭和40年春、大阪大学医学部をご卒業になり当時の第二外科に入局されました。学生運動や青医連運動華やかかなりし頃でしたが、腹部外科一般を習得された後、当時まだ大学病院でも全国的に少なかった特殊救急部（阪大病院出身者は愛着を込めてトッキュウと呼んでいます）で3次救急を扱う部門に勤務を始められました。高度救命医療で多くの人命を救われ、昭和49年には請われて大阪府立病院救急部に転出され、さらに活躍の場を広げられました。昭和54年よりお義父さまの福島文信先生（南有紀子先生のお祖父さま）の後を継がれ福島病院院長就任、旭区医師会へも同年1月1日にB会員、同3月20日にA会員として入会されました。

当時、福島病院は阪大の特殊救急部と連携され大阪市の救急医療、特に交通事故の第一線を担われ、福島病院のすぐ近くある実家で当時は学生であった私が寝ているとそれこそひっきりなしに救急車がやって来っていたことを思い出します。先生は日夜、

救急医療に邁進され、まるでノイヘレンのように病院に寝泊まりされ、夜食は“安っさん”でよくとっておられたことを多くの先生もご存知のことと思います。これは後年、高齢になっても続けておられました。

14年後輩の私が南先生に初めてお会いしたのは昭和59年夏でした。当時、私は阪大第二内科で高脂血症と循環器の研究を行っていた頃で、勤務中ある日、うちの息子が実家で大怪我をし福島病院から阪大特殊救急部へ転送していただいた時でした。先生の適切なお配慮のおかげで息子も完治し、今は医師として活躍しています。

時が経ち平成6年に小生が旭区医師会へ入会するとき、お礼も込めて真っ先にウイスキーを携えて南先生にご挨拶にあがりました。その当時のことをよく覚えてくださり、息子も元気ですごしていることを報告させていただきました。阪大医学部には“1年違えば虫けら同然”と言われるほど、上下関係には厳しいバンカラな校風があります。でも先生は同じ医師会の仲間として後輩を暖かく迎えてくださいました。

その後、日々の患者さんの入院や検査の紹介依頼でお世話になったり、ともに所属している阪大友会旭区支部の会合でも仲良くしてくださいました。先生は年1回の学友会旭区支部会合は皆勤でしたね。同門との集まりを楽しみにしておられたことが伺えます。先生は泰然自若という言葉が

ぴったりのおおらかな性格で、何事にも動ぜず、酒席の場でもいつも温厚で、母校の躍進する姿を聞くたびに喜んでおられました。ゴルフもお供させていただきかけたのですが、チョコレートがデカいで！ということで叶いませんでした（笑）。小生が医師会長を拝命したことを報告したときも、「まあ大変やけど、しっかり頑張りいや」と例の調子で暖かく微笑んでくださいました。父が亡くなる時も本人の希望で福島病院に入れていただき大変よくしてくださいました。先生には言っていないのですが、実は小生が5歳の時、ミゼットに足を轢かれて骨折し、先代の福島文信先生に治していただいたことがあります。家族ぐるみでお世話になった先生との思い出は本当に尽きません。

このたびの突然の訃報、今でも信じられない思いです。先生からうけたこれまでのご厚誼とお導きを心より感謝し、安らかな眠りにつかれることをお祈りいたします。あとのことは理事長にゆっこ先生、院長に高橋栄男先生が就任され、先生が愛してやまない福島病院をしっかりと運営されています。救急医療のことはひとまずおいて、好きなゴルフやお酒を楽しんで、ゆっくりお休みください。合掌